

ウルペス カム・アクロス
とある九尾狐の邂逅

-アニマウルペス誕生篇-

著者／流遠亜沙

原作／紙白

スペシャルサンクス／enigma9641

■アニマウルペス 機体解説

機体の構成自体も、L.C.Factory 主任ロゼット・コダールの手により、試作兵装を数多く搭載した実験機となっている。そもそも戦闘用の機体ではなく、ロゼット個人のフィールドワーク用の機体として作成されている。

その為、野性ゾイドの観察を行い易くする為に、高い隠密性能と高感度センサー、更に電子戦装備を搭載している。

民間にまことしやかに伝わるミラージュフォックスと言われる狐型ゾイドを、ロゼットなりに再現した機体ともいえる。

全身に大小合わせて4基のEシールド発生器を搭載しており、特殊塗装装甲と相まって高い防御力を本機に与えている。

※設定の全容は[こちら](#)



型式番号:	LCXX-001
用途:	攻撃、対機甲、対ゾイド、索敵、情報収集
全高:	9.9m (武装含む)
全長:	19.2m (尻尾含む)
重量:	53t
最高速度:	490km/h (瞬間的になら 550km/h まで可能)
装備:	マルチビームキャンユニット、試作型プラズマスマッシャー (口腔内) テイルアサルトブレード (腰部尻尾)、Eシールド発生器 etc
特殊装備:	ジャミングディスペンサー、A・R・S (Auto・Reaction・System) 光学迷彩装置、マルチコントロールテイル (尻尾) etc

東方大陸でゾイドに関わる仕事をしていれば、ロゼット・コダールを知らない者はいないだろう。若くしてマイスターの称号である〈Kamishiro〉の名を祖父から継ぎ、〈L. C. ファクトリー〉を立ち上げた稀代の技術者。その上、容姿端麗で穏やかな物腰から、雑誌やテレビなどの情報媒体で取り上げられる事も多い。自分が知られる事で企業の広告となり、出資者や顧客の獲得に繋がるのであれば、これも仕事の範疇ではあるだろう。

だが、ロゼットという女性は根っからの技術者で、周囲が止めなければ延々と、本来の仕事に没頭し続けるような人間だ。出来る事なら、ずっと研究だけしたい。新たな技術や理論を試してみたい。その先にある究極のゾイドを造りたい――が、現実は厳しい。

無論、ロゼットも大人だ。そんな事は知っている。

〈L. C. ファクトリー〉自体は小規模な企業だが、それでも少なくない数の従業員がいる。彼等を路頭に迷わせない責任がある。

とはいえ、前述の通りロゼットは技術者だ。普段は持ち前の真面目さと責任感で自分を律しているが、それでも限界はある。

そんな時のストレス解消法が、仕事場を抜け出しての实地調査だった。

「うん……ゾイドの駆動音を聞いてると、心が和むよねえ」

うつとりとした口調で、操縦室の狭い仮設座席に身を預けていた、妙齢の娘が言った。

ロゼットだ。

長い金髪と、穏やかな色を湛えた青い瞳。情報媒体で目にする際と変わらぬ美

人だが、今は白衣でもなければ、取材用の見栄えのする衣装でもない、動きやすいパンツルックだった。

ちなみに、女子大生のような容姿だが、こう見えて三十一歳である

もつとも、十代だろうが八十代だろうが、ゾイドの駆動音で心が和む女性は、そうそういないだろう。

「あ、判る！ 駆動音が正常だと、なんだか安心するっていうか」

ロゼットと同じような女性がいた。しかも、その声は彼女のすぐ前方――コクピットの主座席から聞こえた。

このゾイド――〈レイジウルフ〉の専属搭乗者である、リン・ユズキだ。

年齢は二十一歳と、人間としてもゾイド乗りとしても若いが、〈レイジウルフ〉を愛機としてからの変化は著しい。無論、良い方向に。

「駆動音で愛機の調子が判るようになったんだね。えらいえらい」

ゾイドの状態が安定していれば、走行も安定したものになる。ゾイドの走行は荒っぽいものと思われがちだが——特に高速ゾイドは——実際には胴体や頭はほとんど揺れない。走行中の（レイジウルフ）に乗っていて振動を感じないという事は、機体が正常である事、そしてリンが愛機を制御出来ている事の証左となる。

「……ロゼット、なんだか最近、『お母さん』っぽくなってない？」

普通に褒めたつもりだったのだが、リンは素直に喜べなかったようだ。不満——というより、むしろ心配するようなニュアンスの言葉が返ってきた。

「えー。せめて『お姉ちゃん』にならないかなあ？　リンと十しか違わないんだよ？」

苦笑気味に言ったロゼットの言葉を真に受け、リンが慌てて補足する。

「あ、ごめん！　あのね、別に悪い意味で言ったんじゃないやなくて、安心するっていうか、甘えなくなるっていうか、だからその——」

座席の横からロゼットを振り返った際に、耳が隠れるくらいの白いショートヘアが揺れ、リンの端正な容貌が視界に入る。中性的な容姿と性格は彼女の持ち味だが、素材が良いだけに、ロゼットは時々、リンを徹底的に可愛らしく着飾ってやりたくなる衝動に駆られる。

「うんうん。リンは良い子だねえ」

リンは幼い頃、生まれ育った村ごと家族を亡くしている。黒かった髪が今のようになっただけ、当時のショックによるものだ。彼女は少しずつ前に進み、時の流れと共に明るい表情をするようになっていったが、やはり何処か無理をしているように周囲の目には映っていた。

それは今でも変わらない。

しかし、数ヶ月前に（レイジウルフ）を愛機として以来、リンは確実に変わった。具体的に何が、と言われると言葉にしづらい。無理をしているように見えるのは相変わらずだが、以前のように心配するほどでもなくなったというか、本当に無理だと感じたら相談してくれそうで、これまでのような『危うさ』を感じさせなくなった。

愛機が出来ると変わるゾイド乗りは多いが、（レイジウルフ）との出会いが、リンを良い方向に変えてくれたのだろう。彼女の成長を近くで見守ってきた一人として、ロゼットはそれこそ、母親のような気持ちだった。

「——でも、操縦中は前を向こうね？」

「あ……うん」

やんわりと窺たしなめられ、リンが前方を向く。

車両だろうとゾイドだろうと、前方不注意は重大事故の元だから。

とはいえ、この惑星 Zi は未開の星であるかのように荒野が多い。リンがゾイドの走行中に脇見運転わきみをしたのも、危険はないと判断しての事だろう。実際、この周囲にも何もない。

「ねえ、この方向で合ってるんだよね？ 特に何も見えないけど……」

モニター脇わきに表示されている表示窓サブ・ウインドウ ナビの案内に従って愛機を走らせてきたが、目的地が近付いてきたにも関わらず景色が変わらないため、リンが不安げに訊たずねた。

「うん。そろそろレアヘルツ圏内に入るから、説明した通りにね」

対して、ロゼットは変わらず穏やかな口調で答えた。

多忙な日々を送る彼女が、本来は手荷物てにもつなどを一時的に収納する空間スペースに、仮設座席シートを設けてゾイドに乗っているのは、趣味と実益を兼ねた実地調査のためだった。

そう。今まさに、ロゼットは仕事を抜け出し、盗んだ自動二輪車バイク——もとい、自らが設計したゾイドで走り出している真っ最中なのだ。

まあ、操縦はリンがしているし、従業員達も半ば黙認しているため、問題にこそならないのが幸いといふか。これもロゼットの人徳なのだろう。

「——来た！」

「へっ!?!」

不意に、走行中の「レイジウルフ」の駆動音に乱れが生じ、機体が不安定に揺れた。先ほどまでの安定した走行ではない。ロゼットの位置からは見えないが、操作卓コンソールの計器や表示も、まともに機能していないはずだ。

心構えはしていたつもりでも、やはり実際に状況が起こると動揺する。愛機の不調に取り乱しそうになっていたリンに、ロゼットが指示を送る。

「リン、パルス・ガードを！」

「う、うん……!!」

リンが操作卓を操作すると、ほどなく「レイジウルフ」は常態じょうたいを取り戻した。パルス・ガードが機能したのだろう。

ゾイドの制御系を狂わせる電磁波、これを『レアヘルツ』と呼び、発生する理

由は解明されておらず、突発的に発生する事すらある。そこで対抗策として作られたのが『パルス・ガード』である。レアヘルツが一種の信号パルスであり、波形パターンパルスの解析は可能だったため、レアヘルツ対策として、基本的にすべてのゾイドはパルス・ガードを装備している。

しかし通常のパルス・ガードでは、この周辺に発生するレアヘルツの影響は防げず、一帯は進入禁止区域とされていた。

「……大丈夫、〈レイジウルフ〉？」

全身を濡らした犬が水を弾き飛ばすように〈レイジウルフ〉は身を震わせ、リンに応えるように短く咆哮を上げた。

問題はなさそうだ。

「よかったあ……」

「ちゃんと効いたみたいだね」

ほっと胸を撫で下ろすリンと、満足げに頷くロゼット。

〈レイジウルフ〉に装備されたパルス・ガードは、この一帯に発生するレアヘルツに対応出来るよう、調整と出力強化がされている。正直、この一帯には何もなく、避けて通ればいいだけなので、これもロゼットの趣味の産物と言えるだろう。

「さて、やっぱり何も無いけど——」

周囲を見渡しても一面の荒野で、大地と空と地平線、そして太陽と雲くらいしか見えない。

レアヘルツの発生理由は判らず、そもそも理由などないのかもしれない。それでも、特殊なレアヘルツの発生というのは他に報告がないため、何か特別な場所なのではとロゼットは考え、調査に来たのだ。

「リン、下に降りて——」

みようかと言いかけて、ロゼットは〈レイジウルフ〉の挙動に気付いた。ゾイド乗りでないロゼットにも判る。明らかに周辺を探っているような動きだ。

「何かを感じてる……?」

「リン、各種センサーに何か反応ある？」

レアヘルツがパルス・ガードによって無効化された今なら、センサーが機能しているはず。そう思ってた事だったが。

「ううん。レーダーも同じく。ただ——」

「うん?」

「〈レイジウルフ〉が——『何かいる』って」

〈感応者〉かんのうしやと呼ばれる人間がいる。程度はそれぞれだが、ゾイドの気持ちがる者を、そう呼ぶ。

もつとも、愛機とその搭乗者の関係であれば、ある程度の意味の疎通は出来る方が普通と言える。リンの場合は愛機の〈レイジウルフ〉だけでなく、仲間のゾイドにも好意的な感情を向けられており——要はゾイドに好かれやすい。

それは彼女の優しさにゾイドが応えてくれるという、ただ当たり前の事。

だが、ゾイドをただの兵器として扱う者も少なくない現代において、それは『当たり前』ではなくなっていた。

無論、それだけでリンを〈感応者〉と断定も出来ないのだが。

「い・る・っ・て？」

ゾイドの勘かんは鋭すまじい。〈レイジウルフ〉が感じている以上、何かがあるのだろう。

「〈レイジウルフ〉もよく判らないみたい……でも、普通じゃない感じで——」

リンは〈レイジウルフ〉が感じたものを、ロゼットにも判るように翻訳ほんやくしてくれた。恐らく、リンは感覚的に〈レイジウルフ〉が感じたものを理解している。

だが、それを第三者に伝えるには言語化するしかなく、感覚的なものを言語化するというのは、非常に難易度が高い。

「だけど、嫌な感じはしないって」

「そう……」

ロゼットは考える。

此処ここは特殊なレアヘルツの発生地帯で、ゾイドであれば制御系を狂わされて暴走してしまう。という事は、此処にいる何かはゾイドではない？ いや、普通ではないゾイドの可能性もある。それは、どういう存在か？ なぜ、暴走しなかった？ 普通でないなら暴走しないのも道理だが、そうなると突然変異種か？ もしくは未確認の種か？ しかし、そもそも見える範囲にはゾイドらしき物体はない訳で——

「降りてみよう」

考えても結論は出ない。

各種センサーに、人体に有害なものは感知されていない。ならば、自分の目と耳と感触で調べるしかない。

「リンは念のため、〈レイジウルフ〉で警戒をお願い」

「ロゼット……判った。気を付けてね」

不安げなリン。止めたいが、ロゼットの意思を尊重して、自分の気持ちを抑え

ているのだろう。他人の気持ちになって考えられる、やさしい娘なのだ。

「ありがとう。万一の時は助けてね？」

「任せて！」

力強く頷うなづいてくれたリンに内心で礼を言い、ロゼットは一人（レイジウルフ）の操縦室から荒野に降り立った。



それは眠っていた。

なが
永い永い、悠久の時を。

ああ
（嗚呼、逢いたい——）

眠りとは死にもっとも近い状態だという。

であれば、眠り続けている今の状態は、死んでいるのと何が違うのだろう。

（声が聞きたい。我われを優しく呼んでくれた、あの声が——）
敵に討たれて死ぬ事も出来た。

それを良しとせず、自ら眠りに就つき、周囲と断絶したのはなぜか。

（されど、汝なんじはもういない。だが、それでも——）

きつとそれは、死にたくないという本能とは別に、生きてさえいればという希望すがに縋すがったのだろう。

死んだ者には二度と会えないと知っていて、それでも尚なお。

（——？）

久しく誰も訪おとずれる事のなかったこの地に、侵入するものがあつた。

『結界』に侵入すればゾイドは正常ではいられなくなるため、事実上、人間は踏み込めない。ゾイドを使わずに、わざわざ人間が足を踏み入れる理由もない以上、この一帯は放置され続けると考えていた。

（結界を抜けてきたか。物好きな人間がいたらしい）

人間というのは知恵が働く。道具を作り出す器用さがある。ならば、結界への対応を可能とする者も、いつかは現れるだろう。

（……………）

無視してもよかつた。結界内に入れたとしても、それで終わりだ。何も見つけられずに帰るしかない。

だが、それは興味を持った。わざわざ対策を講じ、こんな辺鄙へんぴな場所までやっ

て来た酔狂すいきょうな人間に。

(ゾイドが一体。降りてきたのは若い娘……ふむ、彼女は搭乗者ではないのか) 娘が地上に降りると、ゾイドは周囲を警戒するような挙動を見せた。野性ゾイドでなければ、搭乗者なしに自律行動は採れない。

娘の方は周囲を探索しているらしい。心拍数が高いが、緊張しているというよりは、気分が高揚しているのだろう。

(……………)

もどかしい。外の状況は感覚的にしか判らないため、サイズや体格などから人間の娘であるという事は判断出来ても、容姿は想像するしかない。

そうして娘の動向を暇つぶし程度に観察していると――

(……………!?)

声が聞こえた。

二度と聞く事は出来ないと思っていた声が。

(コエ……声が聞こえる……懐かしい声……嗚呼、この声は――)



ロゼットが(ヘイジウルフ)を降り、周囲の探索を始めて約三十分。当然と言えば当然だが、何も見つからない。何の変哲もない荒野で、本当にそれ以上でも、それ以下でもない。レアヘルツの発生に条件や法則性が見つかっていないのは、そもそも、そんなものは存在せず、完全に無作為性だからかもしれない。この一帯に発生する特殊なそれも、何か意味があつての事ではないのかもしれない。

「無駄足だったかなあ……」

『フィールドワーク
実地調査に出たからといって、必ず何かしらの成果が得られる訳ではない。』何
もなかった』という結果もまた、成果と呼べなくもないが、それはさすがに前向き
思考がすぎる。

少なくともロゼットは、ぼやく程度には落胆していた。

すると――

『――ロゼット！ 九時の方向！』

不意に(ヘイジウルフ)の外部スピーカーを通して、リンの音が聞こえた。焦つ
ているというより、単純に驚いている様子だったので、ロゼットは慌てず指定さ
れた方向に目を向けた。

（レイジウルフ）から見て九時の方向——つまり左真横——其処には、巨大な結晶体のような物体が鎮座していた。気付かないうちに現れた訳ではない。むしろ、ずっと其処にあつたにも関わらず、気付かなかつただけのような。

「……リン、一応訊くけど——あんなのなかつたよね？」

『なかつたよ！』

通信機を使つて問いかけるが、やはり予想通りの答えが返ってきた。リンはただ動揺を抑えきれないらしい。

「光学迷彩の類なら、センサーに何らかの反応があつたはず。という事は、認識が阻害されていたのかも……」

『えつと……見えてたけど、脳が認識しなかつたって事？』

人間は物体を直接見ている訳ではない。物体に光が当たり、反射されたそれが網膜に投影され、脳に送られる。大まかに言えば、それが『見る』という行為だ。つまり、光を反射せずに吸収したり、あらぬ方向に反射してしまえば、物体は光学的に『消える』事が可能となる。

この場合、視神経を通して送られた景色に結晶体が映っているにも関わらず、脳がそれを『路傍の石』であるかのように気にも留めなかつたため、ロゼットもリンも結晶体の存在に気付かなかつたのだ。

確かに其処に存在していても、気付かなければ、その存在はないに等しい。

認識論は哲学の領域になるため、ロゼットも詳しくはない。

今はそれより——

（どうして急に見えるように——認識出来るようになったんだろう……）

単純に考えれば、認識を阻害していた何かがなくなったのだろう。

だが、なぜ？

理由は結晶体に眼前まで近づく事で、なんとなくだが、判った気がした。

「……見つけてほしかつたんだよね」

結晶体に手を触れ、中のそれに呼びかける。

距離と光の反射で判らなかつたが、結晶体には中身があつた。

それは九本の尻尾を持つ、見た事もないキツネ型の野生ゾイドだつた。

とある九尾狐の邂逅

ウルペス カム・アクロス

・アニメウルペス誕生篇 (前編)

未知のキツネ型野生ゾイドの発見から、約一年が経過していた。ロゼットが手を触れた直後、キツネ型野生ゾイドを護るように覆っていた結晶体は砕け、化石化していた本体は「L. C. ファクトリー」に運ばれ、ちよつとした騒動となった。

化石化によるものか、『顔』が何の装飾もない仮面に覆われているような形状となっていた事から、それは気付けば「白面」という名で呼ばれていた。

また、「ハクメン」と同様に運ばれた結晶体の破片は、『九尾の狐』の伝説に準え、『殺生石』と名付けられた。こちらは未知の鉱物で、一切の走査を受け付けなかった

——認識阻害が解かれる前、熱的・電磁場的・音響的センサーにも反応しなかった——解析は進んでいない。

年代測定の結果、「ハクメン」は少なくとも化石化して十万元以上が経過しており、古代種と認定された。ゾイドコアが健在である事、生態は現代のゾイドとほぼ変わらない事が判明し、新たな機体の設計・開発はロゼット主導の下、順調に進められた。

しかし、思わぬ事件によって「ハクメン」の戦闘機械獣化は中断される事となる。平行世界からの来訪者——「アナザレージ」の襲来によって。

結果だけを述べれば——当該事件については完全部外秘とされている——「アナザレージ」と呼ばれるゾイドは殲滅され（これも諸説ある）、対応に当たった「L. C. ファクトリー」と繋がりのある傭兵チームは大きな損害を受けた。

つまり、件の事件に絡んだ諸々によって、「ハクメン」に割く余裕がなかったのだ。だが、事件が終息すれば止まっていた業務も徐々に再開する。

そして、まだ調整や各種テストはあるが、今日が「ハクメン」の一応の完成日だった。

すでに機体は組み上がっており、ゾイドコアの移植を待つ段階だったのだ。

そして——



雲ひとつない晴れ渡った青空を、ロゼットはぼーっと眺めていた。

正確には、空を見ていた訳ではない。天気が良かったので、考え事するにはちょうどいいと思い、屋上に出ていたのだ。初夏と呼ぶにはまだ早い、暑すぎず眩しすぎない陽射しが心地良い。

考えていたのは「ハクメン」の事だった。

発見から約一年。化石化していた生身の身体——それでも金属なのだが——からゾイド

コアを移し、永い眠りに就いていた古代種は戦闘機械獣として現代に生まれ変わった。機体との適合に問題はなく、起動実験も無事に終了した。

これから細かい調整を重ねる必要があるが、ほぼ完成と言っている状態である。だが、そうであるにも関わらず、ロゼットは達成感に浸る気分になれなかった。

通常であれば、これでロゼットの仕事は終わりである。細かい調整は、搭乗者と担当整備士で詰めていくのが定石だからだ。

しかし今回はやはり、そうもいかない。

なぜなら、ロゼット自身が〈ハクメン〉の搭乗者なのだから。

元々、自分用のゾイドの必要性は感じていた。

フィールドワーク
実地調査に出る際、長距離を移動するだけなら通常車両でもいいが、危険を伴う場合もあるため、やはりゾイドでの護衛は必須となる。出来れば本人もゾイドに同乗するのが理想だ。

とはいえ、ゾイド乗りを雇うには安くはない金が必要。以前はリンが搭乗する〈コマンドウルフ〉に同乗する事が多かったが、〈レイジウルフ〉を得た事で彼女も傭兵としての仕事が増えたため、気軽に頼みづらくなってしまった。

そこに〈ハクメン〉である。

これを自分用の高性能機に仕上げれば、気兼ねなく一人で出かけられるという訳だ。

斯くして、〈ハクメン〉はロゼットの思い描いた機体として完成した。

兵器としての優秀性を何に求めるかにもよるが、敵から身を護り、返り討ちにしてしまえる要撃機としての能力なら、これまでにロゼットが手掛けてきたゾイドの中でも随一と呼べる。

本職ではないロゼットが、初めて搭乗者としてゾイドに乗ったのだから、思うところはあろう。だが、ロゼットの中にあるのは興奮や不安といった感情ではなかった。

「古代種……か——」

〈ハクメン〉の起動実験開始直後、ロゼットはいくつかの映像を幻視した。

三つの月。

現代とは違う文明。

見た事のないゾイド。

恐らくは〈ハクメン〉が化石化する前の時代——つまり、少なくとも十万年以上前の惑星Ziの光景という事になる。それ自体も興味深くはあったが、ロゼットが気になったのは、断片的に見た〈ハクメン〉に関する記憶だった。

〈ハクメン〉は当時の人類と敵対し、最後は自ら化石化し、周辺を特殊ハルスと毒霧で覆

い、永い眠りに就いた。

「へハクメン」を覆っていた『殺生石』は、毒霧が固形化したのかな……認識阻害は、その影響？ 特殊パルスとの相互作用の可能性もある。レアヘルツと酷似した波形パターンが一部あったし、特殊パルスはレアヘルツの一種なのかも……」

手慰みに仮説を手元のレポート用紙に箇条書きするが、すぐに筆記の手が止まる。今はそんな気分ではない。

レポート用紙とペンをベンチの脇に放り、ロゼットはまた、ぼーっと空を眺める。

「……………」

眠りから覚ましてよかったのだろうか。

あのまま眠らせてやった方がよかったのではないか。

へハクメンの記憶の断片を幻視しからずと、ロゼットはその事を考えてしまっていた。

「——あれ、主任？」

考えても答えの出ない問いを延々と頭の中でループさせていると、不意に声をかけられた。相手は白衣を着た研究員の女性だ。見た目は二十歳そこそこといった容姿で、まだ白衣に着られている感がある。

「あ、サボってないよ？ ちょっと休憩してただけで……ほら、こうやって青空の下で考えると思わぬ発想が——」

「サボってたんですね」

「……ごめんなさい」

彼女のジトつとした視線に耐えられず、ロゼットはひとまず謝った。小柄で礼儀正しい娘なのだが、言にくい事を直球で言えてしまう、不思議な迫力があるのだ。ちなみに、彼女の淹れたコーヒーは美味いと評判だったりする。

右手に如雨露を持っているところを見ると、植物か何かに水をやりに来たのだろう。そういえば、プランターらしきものが置いてある。陽当たりも良好なので、屋上は植物を育てるのに格好の場所かもしれない。

「というか主任、今日は午後から私用で出かけられる予定でしたよね？ どうして、またこんな所に？」

不思議そうに娘はロゼットに訊ねた。

「——あー！」

〈ハクメン〉の事で頭がいっぱいで、完全に午後の予定を忘れていた。

「忘れてたんですね」

「……ごめんなさい」

「別にそれは謝らなくても」

反射的に謝ってしまったが、確かにそうだ。

ロゼットは娘に礼を言うと、すぐに〈L. C. ファクトリー〉を後にした。



目的によって程度の差こそあれ、病院という施設に足を運ぶのは、やはり良い気分ではない。怪我や病気を治療し、健康になるための場所だが、それが叶わない場合も多々ある。そういう意味では、病院は戦場に次いで『死』という言葉を連想させる場所かもしれない。

ロゼットが訪れていたのは、市内にある総合病院だった。先の事件——〈アナザーレイジ〉襲来における被害は、ゾイドだけでなく搭乗者にも及んでおり、今日はその見舞いに来たのだ。

「ハン、ロゼットだけぞ」

目的の病室に着き、扉打ちを二回、続けて名前を告げる。

「——お、おう!? ちょっと待ってくれ!」

「?」

ドアの奥からは焦った様子の男性の声。午後に来る事は伝えておいたはずだが、ひよつとしたらロゼットのように忘れていたのだろうか。

待たされる事もなく、すぐに室内に通されたため、ロゼットは特に気にせず見舞いの品を渡し、来客用のパイプ椅子に腰を下ろした。

「誰か来てたの?」

「ああ、リックが急に来た。三十分くらい前に帰ったよ」

パイプ椅子が開いた状態でベッドの脇に置かれていた事からの連想だったが、正解だったらしい。ロゼットが来るから前もって準備していた——とは考えなかった。失礼だが、そんな心配りが出来る青年ではない。どちらかといえば『ロゼットが来るから、そのままでもいいか』と考えるタイプだ。

彼の名前はハン・カミジヨウ。二十八歳。

身長は百七十センチほどの中肉中背。東方大陸ではよく見かける、黒い髪と茶色の瞳。

顔立ちは整っており、充分に二枚目で通じるだろう。

今は青い患者着姿で病院のベッドにいるが、普段は傭兵を生業なりわいとしていたゾイド乗りで、その実力は東方大陸でトップクラスと名高い。それはハンの愛機〈ジェノクラウエ〉に依るところも大きい。ゾイドの性能を引き出せるのもまた、搭乗者の実力と言えらる。

以前は傭兵としてガイロス軍に所属していたが、ネオゼネバス軍との戦争が終わると軍を離れ、フリーの傭兵に戻っている。現在は仲間達と民間軍事会社P M Cのような形態とを探っており、〈L・C・ファクトリー〉が窓口としての役割を果たしている。

元々、ロゼットと傭兵チームには親交があり、互いに新しい事業を始めるタイミングだった事もある。これは極めて自然な流れと言えた。

そして——〈L・C・ファクトリー〉と傭兵チーム、どちらの業務も順調に実績を重ねていた頃に事件は起きた。

〈アナザレイジ〉襲来である。

戦いは熾烈しれつを極め、〈ジェノクラウエ〉は中破。ハンも傷を負った。

「左腕、もう吊らなくていいんだね」

「ギプスも明日には外はずすらしい」

ハンが包帯に覆われた左腕を上下に揺らし、平気である事をアピールする。

「一応、今週で退院なんですよ？」

「ああ。運動とゾイドは絶対に駄目らしいけどな」

「お医者さん、かなり渋ってたもんですね」

「正直、もうちょっと入院してもいいんだが……そろそろ病院食以外のものが食いたい」
ベッドで寝ている事については、あまり不満はないらしい。ゾイド乗りといっても、血気盛んな者ばかりではない。ハンも平時は、愛機の背中では——と空を眺めて過ながすような性格だったりする。

「じゃあ、快気祝いに皆で何か食べに——」

行こうと言いかけて、ロゼットは口を噤つぶんだ。浮かんだのはリンの顔だった。

リン・ユズキ。

ハンとチームを組んでいるゾイド乗りの一人である。

「……リンの様子は？」

「うん……精神的にはだいぶ落ち着いている。身体からだの方は、まだ絶対安静だった」

ハンの病室に来る前、ロゼットはリンの病室にも寄っていた。彼女もこの病院に入院しているのだ。

先の〈アナザレイジ〉襲来において、もっとも大きな傷跡を負ったのはリンだろう。平行世界から現れたゾイドと、その搭乗者——それは『向こう側』の〈レイジウルフ〉

とリンと呼べる存在だった。

激闘の末、〈アナザーレイジ〉は殲滅^{せんめつ}。

搭乗者も救えなかった。

〈レイジウルフ〉は中破。リンは戦闘による負荷で、前述の通り絶対安静状態。

事件が終わってから、まだ二ヶ月弱。元の生活に戻るには、まだ時間が必要だろう。

「そうか……」

「……………」

気まずい沈黙が病室に降りる。

「——そうだ。〈ジエノクラウエ〉の大規模改修、ほぼ終わったよ。名付けて〈ジエノクラウエリペア〉！」

「え？ もうか？」

此処^{ここ}で自分達が気を揉^もんでいても仕方がない。それを理解しているため、ハンも話題の転換に乗ってくれた。

「動かせる状態じゃないと不安でしょ？ 〈ジエノクラウエ〉も壊れたままじゃ可哀想^{かわいそう}だし」

実際には、〈レイジウルフ〉と同時進行するより、搭乗者の復帰が早い〈ジエノクラウエ〉を優先すべきと判断した結果だったが、それはロゼットの胸^{むね}に留めた。

「そうか。ありがとうな、ロゼット」

「いえいえ、お仕事ですから」

場^ばを和ませようと、ロゼットは少しおどけて、そう答えた。それは素直に礼を言ってくれるハンに対する、ロゼットなりの照れ隠しでもあったのだが、それに微塵^{みじん}も気付かないのが彼の朴念仁^{ぼくねんじん}と言われる所以^{ゆゑ}だ。

「——？」

ふとロゼットが視線を下げると、足元——ベッドの下から、何かが顔を覗^{のぞ}かせていた。「ハン、何か落ちてるよ？」

ロゼットが拾い上げると、それは紙袋だった。雑誌が何冊か入っ^いつていそうなサイズと厚みだ。

「っ!? な……なんだ、そんな所^{ところ}にあったのか。いや、探してたんだ。よかったなあ、見つかって——」

ハンの動揺を隠せていない表情。平静^{へいせい}を装^{よそお}ったわざとらしい口調。泳^{およ}ぎがちな目線。明らかに紙袋が理由だろう。

「……………」

ロゼットも子供ではないし、思春期真つ只中の少女でもない。紙袋の中身くらい予想がつく。別に非難するような事でもないし、むしろ健康な男性であれば普通なのだろうと思う。なので、中身に触れるつもりはなかったのだが。

「あ。ハン、そっちはギプスが——」

「うおっ……!!」

紙袋を我が手に取り戻そうと伸ばしたハンの左手は、しかしギプスによって上手く掴めず、紙袋の中身をぶちまける結果となった。

……………

再び、別の意味で気まずい沈黙が下りた。

紙袋の中身は予想通りの代物で、いわゆる十八歳未満は閲覧してはいけない雑誌だった。た。

ロゼットも気が動転していたのかもしれない。どうしていいか判らず、無言よりはいいだろうと、件の雑誌の見出しを適当に読み上げてみた。

「『金髪特集 青い瞳の美女達』——」

「……………」

「『金髪碧眼のお姉さんは好きですか?』——」

「……………」

「『金色の髪で青い目のお姉ちゃんに好かれ過ぎて困っている件』——」

「……………」

すべての雑誌の見出しに共通する単語がある気がするが、偶然だろうか。

『金髪』『青い瞳』『お姉さん』。

それらはロゼットにも当てはまる特徴で——

「……………ハンは金髪碧眼のお姉さんが好き、なの?」

自意識過剰だと思いつつも、『自分も彼の守備範囲内なのかも?』とか、『むしろ、私の面影を求めて?』などと考えてしまい、『貞淑な貴族の令嬢が溺れる肉欲!』と書かれた雑誌——もちろん金髪碧眼のお姫様っぽい衣装の女性が表紙——で口元を隠し、もじもじとした態度で訊ねるロゼット。

「えーっと……なんて言えばいいのか……」

対して、四つ年下の青年はしどろもどろになるばかりだった。



リック・ルッケンスは情報屋である。

それも、ただの情報屋ではない。ゾイドを使い、時には生身で危険な場所へ潜入し、場合によっては工作活動も行う、自称〈戦う情報屋さん〉である。

大人の男性としての色気を漂わせる三十五歳。

百八十センチの長身と、くすんだ金色をした長髪。チャライ感じは否めないが、それでも美形ではあるだろう。まだ男を知らない小娘であれば、あつという間に骨抜きにされてお持ち帰りコース一直線。印象としては、ゾイド乗りというよりはホストっぽい。

そんな彼だが、意外にも女性からの評判はすこぶる悪い。

最悪と言っている。

理由は女癖くせの悪さだ。

女性に対し、息をするようにセクハラを行う。倫理も道徳もお構いなし。時には、ほぼ犯罪と呼べる行為にまで及ぶ。

それにも関わらず、彼がこうしてお天道様てんとうさまの下にいられるのは、それだけ情報屋としての腕を必要とされている事の証左なのかもしれない。

まあ、なんらかの裏取引があるとか、彼に弱みを握られている権力者がいるとか、黒い噂も多々あるが。

ただ、悪人ではない。

女性に対する敬意は誰よりも払っている。

問題は、女性に対してセクハラしないのは失礼だと、本気で考えている点だった。

リックという男は、要は『困ったちゃん』——精一杯の婉曲表現えんきょく——なのだ。

「——おっ？」

総合病院の正面口から出てきた女性を認め、ひらひらと手を振って見せる。遠くからでも判る綺麗で長い金髪は、絶好の目印と言える。

「やあ、ロゼット。久しぶり——」

「ストップ止まってそれ以上近付かないで」

金髪の女性——ロゼットは、その美貌がはつきりと見て取れる距離まで来ると、リックの挨拶を容赦なく遮さへきった。左手には手榴弾を思わせる何かを握にぎっており、右の人差し指は安全ピンを思わせる輪っかにかかっている。仮に手榴弾であったなら、いつでも起爆可能と思わせる状態だ。

「久しぶりだね、リック君。でも、挨拶はいいや。ハ・ン・の・お・見・舞・い・の・あ・れ、リック君なんだってね？」

ロゼットは穏やかな表情と口調のまま、そうリックに問うた。つい一時間ほど前、彼は

知人であるハン・カミシヨウの病室を訪れていた。その時の事だろう。

「ああ、あのエロ本ね。そうだよ。入院生活ってストレスだけじゃなくて、あつちの方も溜まるじゃない？ でもナスさんが処理してくれるなんて都市伝説だから、必要だと思っ
て。いや、苦勞したよ。今は好みも多様化してるから、金髪碧眼のお姉ちゃんに特化し
たのを集めるのは」

ロゼットの目が笑っていない事に気付いていないリックは、べらべらと上機嫌で話を続
ける。低音で艶のある良い声なのだが、それだけに内容の残念さが際立ってしまっている。

「ちなみにこれもハンにあげるつもりで入手したんだけど、すぐロゼットに似てる女優
さんが写ってたから、自分用にも買っちゃったよ。ほら、似てない？ あ、もちろんロゼ
ットの方が美人だし胸も大きーああっ!？」

本人を目の前に、似ているボルノ女優のグラビアに鼻の下を伸ばしてデリカシーの欠片
もない発言の最中、雑誌は奪られると左右に両断されてしまった。薄いため、女性の力で
も破るのは容易い。

「なんて酷い事を……僕が何をしたっていうんだ!？」

「胸に手を当ててみるといいよ!？」

「じゃあ、さっそく……!？」

「自分の胸にね？ 近づいたらピンを抜くよ?」

雑誌を破くために離していた右の人差し指の位置を戻し、ロゼットは再びリックを
牽制した。

「ちなみに、その手榴弾みたいなのは?」

「ただの防犯ブザーだよ。すごい音がするから覚悟してね?」

ロゼットが『すごい音』と言う以上、下手をすれば高周波で動けなく可能性すらある。

傍の大通りは交通量が多く、すぐ其処は病院である事も考慮すると、大惨事に及ぶかもし
れない。

「……オーケー、判った。君の許可なく、これ以上近付かない事を誓おう」

「うん。判ってもらえて嬉しいよ。——それで?」

「うん?」

ロゼットの言わんとする事が判らず、リックは疑問符を浮かべる。

「ハンのお見舞いだよ! 気まづくなっちゃったじゃない!？」

痺れを切らしたらしく、ロゼットが頬をわずかに赤く染めて激昂した。

リックの思惑通り、あのエロ本をきっかけに一悶着あったらしい。

「それだけでも、ハンも悪いんじゃないかなあ? もうすぐ君が来ると知っていたながら、し

「つかりと隠す事もせず、誘惑に負けて読んじやった訳でしょ？」

「詳細は判らないが、なんらかの経緯があつてエロ本がロゼットの目に触れた。つまり、ハンはそれを直前まで読んでいて、慌てて隠した可能性が高い。」

「うっ……」

リックの正論にロゼットがたじろぐ。無論、彼の言っているのは詭弁だ。あわよくば程度だったが、わざわざロゼットが来る時間帯を調べ、準備を整え、そうなるように仕向けたのだから。

「そうかもしれないけど……いい歳してこんな事して、もうリック君も子供じゃないんだから」

「良いね。ロゼットに『リック君』って呼ばれて叱られると、童心に帰るといふか。僕は母性を求めているのかもしれない……」

「……私、リック君より三つも年下なんだけど」

「些細な事だよ。知ってるかい？ 最近は『バブみ』って言って、年下の女性に甘えるのが一部界限では流行らしいよ？」

「……言葉を選ぶけど、世も末だね」

会話の内容というより、リックとの会話そのものに疲れた様子で、ロゼットはそう評した。

「それじゃあ、この話はこれでお終い！ 今日ロゼットに話があつてきたんだよ」

「え？ 新手的クハラを思いついたからじゃないの……？」

心底から意外といった表情を浮かべるロゼット。

「君は僕をどれだけ暇人だと思ってるんだい？」

「だって、リック君は暇潰しじゃなくて、本気で馬鹿な事をしてるんでしょう？」

「その通り！ ……そうか、さっきの言い方だと語弊があつた訳だ」

リックは無駄に良い声で続ける。

「訂正しよう。君にクハラをするのと同じくらい大事な話があつたんだ」

「そう言われちゃうと、大した話に思えなくなっちゃうよね……」

苦笑しつつもリックの話聞く事にしたロゼットだったが、彼の口から齎されたのは、確かに大事になりそうな内容だった。

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『とある九尾狐の邂逅』ウルペス カム・アックス「アニメウルペス誕生篇（前編）」をお届け致します。

昨年完成した紙白さんの『アニメウルペス』ようやくバトストも書けました——前編ですが。後編も早めにお届けしますので、お待ちいただけると嬉しいです。

少しだけ内容についても触れておきます。

まず時間軸は小説『レイジウルフ誕生篇』の後です。紙白さんから伺った（うかがアニメウルペス）の完成時期が、年表で言う『アナザレイジ襲来』の後だったため、2ヶ月ほど前にそんな事件があったという前提で書いています。

とはいえ、本作はロゼットとアニメウルペスのお話なので、それによってロゼットの周囲がごたごたしていたくらいに理解していただければ充分です。

『アナザレイジ襲来』も、いつか書く日が来るといいなあ……。

新キャラについても少しだけ。

リック・ルッケンスが初登場です。紙白さんが製作された『シャドーフォックス』の搭乗者で、設定もあるので、いつか出したいと思っていました。イメージCVは諏訪部順一さんです。別に、あれを倒してしまっても構わんのだろう？

そろそろ謝辞を。

まずは原作者であり、本作にも多大な協力をいただいている紙白さんに感謝を……まだ続きますが！

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。続きますけどね！

2018 / 1 / 27 流遠亜沙

感想を書く

『Gallery of KAMISHIRO Side ンペ』ページに戻る